

男が男を語る：古くて新しいジェンダーの話

瀬名波栄潤

はじめに

男とは何か。OEDで「man」を調べてみると、単語としては「男」と「人類、人間一般」の両方が併置されており判然としない。熟語に目を向けると「like a man (堂々と), man to man (正直に言って), be the man (男らしくする), to be one's own man (一人立ちする), そして a man of straw (弱い人間)」などの表現が連なり、「man」は「男らしさの神話」を構築するパフォーマティヴな言語であることが少しづつわかってくる。ならば、このような神話はどこからくるのか。男女の生殖器やホルモンの量または脳の重さの違いに起因していると考えるより、少なくとも現在の段階では社会や文化の影響によって生み出されたと言わざるを得ない。男は生まれたときに青いリボンをつけられ、男として育てられる。フェミニストは「女は作られる」と社会を非難したが、男もまた社会によって作られるのである。

しかし、それでも「男とは何か」という問い合わせへの答えにはならない。そこで、近年注目を集めている男性研究に解答を委ねてみる。そして男性研究の視点でアメリカ合衆国の歴史を再構築し文学作品を分析してみると、男性作家や男性の登場人物達は男性神話を信奉したり抵抗したりすることで自らのアイデンティティーを模索または確立してきたことがわかってくる。本稿は、2006年12月名古屋大学英文学会クリスマスセミナーでの同題講演を基に、古くから漠然と研究されてきた人間全般を指し示す「男」ではなく、現代のジェンダー研究の視点から「男」を分析する。様々な男達の男についての語りは、実は最

後のジェンダー問題について語ることであり、新しいジェンダーの話だと言える。それでは、男達の歴史と男達のアメリカ文学史について私論を展開し、男とは何なのかを探りたい。

I. 男達の過去と現在

18世紀の産業革命以降、欧米では女は家庭・男は社会という社会的性役割つまりジェンダー観が確立された。男は、宗教・政治・経済などの公領域を構築・維持・発展させることがその使命となり、そのためには男は、理性的、思慮深い、行動的、経験豊かな、大胆な、勇敢な、率先する、支配する、自立した、強い、雄弁な、肉体的な、大きな、丈夫な、現実的、などがその理想またはあるべき姿とされた。いわゆる男らしさの神話創造である。ちょうど女らしさが社会的構築物であるのと同じように、社会や家庭の中で男達は男になるよう教育され、この男性神話は再生産されていった。

この男性神話が大きく搖ぎ始めるのは20世紀後半、第二波フェミニズム運動が始まった時期とほぼ合致する。フェミニスト達は社会が男性中心であることそして女性達は差別的に扱われていることを指摘し男と社会を非難した。このような反男性の潮流の中で誕生した男性解放運動（Men's Liberation Movement）は1970年代から顕著になる。だが、この運動は男性性否定への抵抗・反発以上に、「男とは何なのか」と自問する男達の苦悩から生まれたと言えるだろう。女性同様、男性も環境によって男へと作られる。男性神話に脅かされる男達の行動は、ポストモダン運動によって生まれた少数派優位社会での男性蔑視に対する反発であると同時に自らを社会的弱者としてポストモダン運動に加入する動きであった。代表的なのは父親運動である。離婚裁判で親権の行方がほとんどの場合母親へ与えられる現実に対し、父親運動の活動家はそれを不服とし父親の親権を主張した。映画『クレイマー・クレイマー』（1979）では、父親の努力も空しく親権は母親へと委ねられる様子が描かれている。男性解放運動とは、男は子育てとは無縁であるとする男性のステレオタイプ化に抗議する動きだった。

1990 年代に入ると、男性解放運動も多様化してくる。社会的弱者である女達が一枚岩となって展開してきた第二波フェミニズム運動が、1980 年代後半から女性の多様性を享受し第三波フェミニズム運動へと移行し始めるのと似ている。白人男性が主流であった男性解放運動も他の人種や運動と結びついて広がりを見せる。男性問題は全体の問題として認知されるのである。

1995 年、イスラム教徒のアフリカ系アメリカ人が The Million Man March を実行する。イスラム教的観点からアフリカ系アメリカ人への差別の歴史を抗議したブラック・アメリカン運動は、男性問題を人種問題と結び付ける。プロミス・キーパーと呼ばれる団体はキリスト教義の実践により男らしさの回復を目指し、1997 年フェミニズムやゲイ解放運動を非難する大規模な集会を開いたことで知られている。

このような動きを、K. クラッターボウは、現代アメリカの「男らしさを巡る展望」を二つに分類して説明している。一つ目は伝統的な男らしさの復権や強化をはかる保守派の動きである。男性の権利派は、現代社会における男性の相対的な権利略奪状況を批判し、ときに女性の主張を男性に対する逆差別だと主張する。精神主義派は、男性性の危機を男性原理の不全状況に求め、その回復を追求しようとする。なかでも、ロバート・プライは傷つきやすい男達の自己回復の道を男同士の密接なコミュニケーションや森での共同生活を通して、「野性的で確信を持った男性性という男性原理の復権」へと切り開こうとする。もう一つの動きは、女性問題を自分達の問題でもあると考える親フェミニスト派の動きである。その代表団体である NOMAS（性差別に反対する男性の全国機構）は、女と男の完全なる平等、ゲイ・レズビアンの平等、そしてより豊かで深く意義のある生き方をしたいという男達を支持している。

男達を取り巻く性のかたちは他にもある。一般的に、性的少数派と呼ばれる人たちは全体の 4-8% の割合で存在すると言われている。その代表的なのがホモセクシャルであり、彼らは現代社会における「ヘテロ（異性愛）」強制の問題や「ホモフォビア（同性愛嫌悪）」の構造を批判する同性愛者解放運動を展開している。目に見えない社会的弱者の権利主張と社会的容認を要求した運動は 60 年代後半からフェミニズム運動や男性解放運動と連動してゲイやレズビア

ンの闘いが顕著になり社会一般の認識も改善されたが、彼らの歴史は黙殺される歴史であったといえる。伝統的ユダヤ・キリスト教觀では生殖を伴わない性は罪悪であり、刑法上では死刑を含む処罰の対象となった。19世紀後半には、同性愛を精神上の疾患であると見なし医学的研究が始まり精神鑑定の対象とされた。20世紀初期のアメリカでは、女装をした男性が男らしくないとして重労働の有罪判決を受け、妻の不倫相手を射殺した男が男らしいとして無罪放免になる判決が社会の喝采を浴びた。しかしながら、1960年代には宗教的・慣習的偏見との闘いとアイデンティティー確立のためのホモファイア運動が始まり、多くのゲイのカミング・アウト・プロセスが促される。1973年には、アメリカ精神医学会が1968年出版の『精神障害の分類と診断のための手引き(DSM)』にあった同性愛を精神障害とする分類の削除を決定。1980年代にはプロジェクト10と呼ばれる肉体的・言語的暴力の対象になりやすい同性愛者を援助するカウンセリングサービスと教育プログラムが各地の学校で行われるようになる。結果、同性愛者間の結婚が公然と議論・実行されるようになる反面、ホモフォビアなどのヘイト集団の登場を招くことになる。

同性愛者の運動は、他の性的少数派に大きな刺激を与えた。身体の性と心の性との間に食い違いが生じ、それゆえに何らかの「障害」を感じている性同一性障害者がそうである。日本精神神経学会の『性同一性障害に関する答申と提言』では「生物学的には完全に正常であり、しかも自分の肉体がどちらの性に所属しているかをはっきり認知していながら、その反面で、人格的には自分が別の性に属していると確信している状態」と表現している。

また、性の多様性はアカデミアにも新風を送り込んだ。「クィア理論」(Queer Theory)である。第三波フェミニズムやゲイ・レズビアンスタディーズとして知られるジェンダー・セクシュアリティの哲学的・理論的な研究から派生し構築された理論である。具体的には、文学分野で言うと、フェミニスト研究者が女性の視点から文学テクストの再検証や埋もれた女性作家の再発見そして文学史の再構築を目指したように、クィア理論ではゲイ・レズビアンの視点からの再検証・再評価を試みる。男と女という単純な二項対立に新たな真実を組み込んだこの理論の発展は、LGBT Studies (Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender)

という学問領域を誕生させた。このような運動や研究の広まりは、1987年にはDSM改訂第3版での同性愛分類削除、1993年の世界保健機構（WHO）の国際疾病分類にあった同性愛項目削除を実現した。

クィア（変）な存在として周縁化された彼らの存在と研究は、彼らがおかれている社会的状況を理解し彼らの視点から社会を見るというだけで終わっていない。最近では彼らの多様な性がジェンダーの枠を超越するものとして、研究や創作活動においても注目されているのだ。

大学の教育・研究カリキュラムに目を向けると、「男」を研究対象とする学問領域が1980年代にはすでに誕生していたことに気づく。合衆国では女性研究の講座が1971年にはすでに55の大学で開講されていたが、男性研究の講座もその約10年後の1984年に40の大学で開設されることとなった。その後、男に関わる運動が保守派とリベラル派で大きく二つに別れるように、学問としての男性研究も二つに別れる。最初に生まれたのは「男性学（Men's Studies）」と呼ばれ、伝統的な「男らしさ」の復権を理想に掲げる保守的な傾向のある研究で、カトリック系の大学や研究者達により推進されることとなった。もう一つは「男性性研究（Masculinities Studies）」で、男性のジェンダー問題を他のジェンダー問題と同じ社会的弱者の観点から研究する。女性研究だけではなくゲイ・レズビアン研究などとも協調して取り組むため、最近のジェンダー研究には欠かせない存在になっている。男性研究は今やほとんどの大学で専門の研究者がおり研究や授業を展開している。ジェンダーセンターばかりでなく女性学講座や女性研究センターでも男性研究は欠かせないものとして複数の科目を提供している。ただ、日本では男性研究は「男性学」と安易に呼ばれ男性性研究の意味で使われることが多い。国外で言及する時には気をつける必要がある。

II. 男達のアメリカ文学史

1990年以降、欧米だけでなく日本でも文学史の再構築が試みられた。キャノンのポストモダン的再検証並びに埋もれた作家達の発掘が一通り終了し新たなる「組み換え」が必要とされたのと、これまでにない視点から文学史を描く

ことが評価されるようになったからだろう。アメリカ文学史を「男」の視点から眺めてみるのもその一つであり、そこには男性神話への忠誠と懷疑の歴史が見えてくる。だが、不思議なことに、男性解放運動が社会的広がりを見せる中、文学研究においても個別の作家に対する男性性研究は海外だけではなく日本でも進んでいるが、その視点でアメリカ文学史全体を再構築する動きは本場アメリカでもまだない。

そこで、ここではまずヨーロッパ系白人男性に焦点を当てアメリカ文学史を構築してみる。新大陸の発見並びに開拓は彼らによって始められたからという歴史的事実が第一の理由だ。だが、それ以外にも、ヨーロッパ系白人男性は主体としての男性性が植え付けられてきたということ、そして後述する少数派の客体化される男性達との対峙という関係で多数派を主体とするのが不可欠であるというのがより大きな理由である。したがって、ここでは白人男性作家達が描き出した男達の歴史を白い文学史と呼び、その概観を簡単にではあるが説明したい。

A. 白い文学史

ヨーロッパ系白人男性には、植民地主義や帝国主義の歴史の結果、多人種多民族の男性を優越して対峙する主体的男性としてのアイデンティティーが要求された。つまり理性的で、自己依存的、力がある、勇気がある、意志が堅い、正直、支配的、抑圧的、排他的、中心的存在、そして後にはKKKにつながる白人優越主義などが付与された。ここでは、新大陸発見以来今日までの歴史を五つに分け、各時代の特徴とヨーロッパ系白人男性によって描かれた小説やノンフィクションの白人主人公を検証する。

1 男らしさの契約の時代：1585-1774

1492年コロンブスのアメリカ発見以来初めてのイギリス植民地建設は、1585年ローリー卿によるヴァージニア・ロアヌーク島で行われたが、恒久的な植民地建設という点では1607年のジェイムズタウンが初めてであった。当初アメリカ大陸はイギリスの植民地であり英国への忠誠が第一義であり、文化も

ヨーロッパからの移入に頼る「貴族」的な生活であった。したがって、南部においては独立直前まで「英國との契約維持が男らしさの尺度」であり、植民地を如何に効果的に支配しその利益を母国へもたらすかという騎士道的な精神と実務の遂行が重要になった想像できる。南部における「男らしさ」は、南部自体がイギリスの領土としてしか意識していなかったため独自の文学表象は残念ながら殆ど見ることはできず、多くは新大陸の体験、記録などの紀行文や紹介文である。一つだけ例を言うならば、1607年ジェイムズタウンに上陸したジョン・スミス船長の記録・体験記『ヴァージニアとニューイングランドとサマー諸島の一般史』(1624)である。新大陸の様子を紹介する彼の行動力とポカホンタスのエピソードは、ヨーロッパ的騎士道精神と類似していると言えよう。

一方、北東部ではピューリタン達がヨーロッパ旧世界での信仰を捨て、新世界での新たな宗教的契約のために植民地を建設したのは対照的である。メイフラワー号に乗った102名のピルグリム・ファーザーズはプリマス植民地上陸時に「メイフラワー契約」を結び神権国家の樹立を目指した。1630年、カルヴィン主義的信仰を唱えるマサチューセッツ植民地が建設され、「丘の上の町」として神権政治国家の樹立を目指し「人間の堕落性」「無条件の神の救済」「贖罪の限定性」「恵みの不可抗力性」「聖徒の堅忍不拔」の五箇条を軸に入植を進める。しかしながら、宗教心の希薄化や「エレミアの嘆き」が囁かれるようになり、しかも1675年から6年にかけてのインディアン戦争以降、本国イギリスの植民地支配が強まり、入植地全てが国王直轄領となり、プリマス植民地は英國国教会非分離派のマサチューセッツ植民地に吸収され、セーレム魔女裁判やエドワーズによる大覚醒運動も空しく「神への忠誠」は薄らいで行くばかりか、ニューイングランドにおける神権政治は国益の犠牲となって行く。

ニューイングランドにおける「男らしさ」の表象は宗教を軸とした説教、体験記、記録、紹介文、日記に見ることができる。これらの中の「公的文書」においては、聖書を基盤として人と神との契約、新大陸を「新世界」と位置付けることでアメリカ大陸の聖書的解釈を施し、男達は信仰するものとしての使命感と説教者としてのリーダーシップを示した。しかしながら、「私的」日記文

では、もっともこれらが公になるのはずっと後のことだが、男である説教者的心のざわめき、つまり信仰と現実との間での揺れが巧みに表現されている。

ウィリアム・ブラッドフォードは「プリマスでの神の王国建設」の歴史を後世に伝えるために『プリマス植民地』を書き、「恐ろしい荒涼とした荒野」を目の前にしながら世界のあらゆる文明と自分達を隔てている海を振り返り、無事上陸できたことを神に感謝している。マサチューセッツ植民地のジョン・ウィンスロップの説教『キリスト教徒の愛の原型』(1630) やジョン・コットンの「回心体験告白制度」は約束の地カナンである新大陸にて『植民地への神の約束』(1630) を遂行するための「男らしい」作品であったと言えよう。

しかしながら、宗教的な共同生活という理想と立ちはだかる荒野での個人生活の現実には大きなギャップがあった。男達はそれらを自己内省できる「日記」という文学形態に書き綴った。ロジャー・ウィリアムズは政教分離、つまり信仰と共同体の分離を唱えることで、信仰心の維持を告白している。同様に、サミュエル・シューアルは『日記 1674-77, 1685-1729, 出版 1878-82』で政教分離を唱えつつも、セイレム魔女裁判の不正や自らの商業主義的傾向を告白している点で信心深いウィリアムズと対照的である。

結局、フレンチ・インディアン戦争後の一連の税制導入に対する植民地者の本国への不満は、「神との契約を交したニューイングランド人」だけでなく、南部の「国王と契約した者達」をも巻き込んで、独立戦争へと向かわせることになる。

2 男の立志伝の時代：1774-1848

第一回大陸会議が開かれ自由と独立への道を歩むこの時代は、アメリカの夢を実現した人物の自伝や伝記といったジャンルに特色がある。「Self-Help」つまり自助努力により自己を律し成功した男「Self-Made Man」についての実話である。その代表がベンジャミン・フランクリンの『自叙伝』である。カーライルに「アメリカン・ヤンキー」と呼ばれたフランクリンはアメリカ的男らしさを具現化した人物であり、彼が『自叙伝』で表わした13の徳目とそれらに向けての自助努力の提唱は、コットン・マザーの『善行論』とロックなどのヨーロッ

パ啓蒙主義の融合により独自のアメリカ的男性神話を創造した。

他にも、愛国心をあおる『イーサン・アレン大佐虜囚記』や、最高裁主席判事ジョン・マーシャルの『ジョージ・ワシントンの生涯』などがある。が、伝記や自伝は事実を書き記したものというよりも、政治的イデオロギーによる自己創出の産物であり、Self-Fashion であると言える。したがって、これらは国家独立と自立のために脚色された男らしさの「国民的神話」を創造するための政治的産物だったのである。

フィクションにもアメリカ的男らしさの原型がこの時期に作られた。クーパーの『革拌物語』5部作である。アメリカの自然と共生する白人男性ナッティー・バンパーの一連の冒険物語は、自助努力によって成功する一部の白人エリート達の伝記・自伝の物語を、西部開拓に従事する一般のまたは普通の白人男性をヒーローイックに描いたものであり、別府恵子氏によるとバンパーは「教育も社会的地位も金も家族もなく、まさにクーパーのいう自らに本来備わっている力で立つことのできる人物であり、森に湖に大草原に空に大いなる神の刻印を見るバンパーは神に恥じることはないかとつねに自らに問いかけるピューリタンから継承された信仰心と雄大なアメリカの自然への信頼と愛情が、一介の狩人である彼の中で見事に融合しているのを見れば、彼こそがアメリカの本来あるべき理想の姿だと考えられたのも当然」である。これは自助努力をするアメリカン・ヒーローとアメリカ国民文学の誕生を意味していた。しかしながら、同時に、特に現代の批評家には、クーパー作品における先住民の描写、例えば『モヒカン族の最後』においてパンプー等を襲う悪党でありヨーロッパ人によって墮落させられた被害者でもあるマグアの二面性を垣間見せる描写には、犠牲を作りながら発展しようとする当時のアメリカに対する作家クーパー自身の「心のざわめき」を見逃すことはできない。残念ながら、当時の読者達はこの作品の両義性には気付かなかった。いや、気付いていたとしてもそれを押し退ける程強い開拓の流れがこの時代にはあったという方が妥当かも知れない。結果、クーパー作品は、一面のみを持って後の時代のダイム・ノヴェルの原型と位置付けられることになる。

3 旅する男の時代：1848-1897

1848 年のカリifornia 金鉱発見と翌年のゴールドラッシュは、アメリカ発展の新たな原動力となり、一般の白人男性にも「アメリカン・ドリーム」が実現可能な時代の到来を告げた。

まず、アメリカン・ヒーローの構築にもっとも貢献したのが、当時絶大なる人気を博していた「ダイム・ノヴェル（10セント小説）」と言われる作品群である。そこには、後進国から資本主義・帝国主義へと変化するアメリカの、所謂ヘンリー・サイダル・キャンビーが言う「自信の時代」におけるアメリカの理想的な男の創出があり、独立期の実在のヒーローをモデルにし「発展し続けるアメリカの自信の時代」をメロドラマティックに演出し、民衆は成功に向けて旅するヒーローを熱狂的に迎え入れた。

しかし、この時代は「男らしさ」のもたらす矛盾が明らかになる時代でもあった。男達の「心のざわめき」の最大の要因となったのは「奴隸制問題」であった。1831 年に始まった奴隸解放運動は公の議論となり、男達は同じ国民同士で戦うことになる。61 年から 65 年までの死者は 61 万 8 千人、21 世紀までのどの戦いより多くの犠牲者を出した。北軍は 1877 年まで南部での進駐を続けた。他にも、帝国主義、資本主義、そしてダーウィンの社会進化論によって生み出された優劣を競う社会は、同じ白人男性にも強者と弱者を生むことになる。1890 年には国勢調査によりフロンティアは消滅したとされた。西部開拓の夢も消えつつあった。

ダイム・ノヴェルは、過度にセンセーショナルさを追い求めるあまり暴力描写が烈しくなったのと映画産業の誕生・発展により次第にその人気は衰えて行った。しかし、『コロンビア米文学史』の編者エモリー・エリオットが言うように「ダイム・ノヴェルは、……暗黙のうちに政治的である冒險と興奮の物語を提供した。その時代の大衆小説、とりわけダイム・ノヴェルがホントの過去というよりもむしろ幻想的な過去を創造したというのが問題点」だったのである。

その頃、アメリカン・ヒーローに幻想的な面と現実的な側面を描いたのが、マーク・トウェインの『トム・ソーヤーの冒險』（1876）と『ハックルベリー・

『フィンの冒険』(1884) だった。2作品とも当時流行であった「冒險物」でありながら、一方はヨーロッパ的男らしさに対抗するアメリカ的天真爛漫な少年を主人公としており、もう一方は奴隸制度や搆金主義に大きく動搖する純粋な少年を主人公として描いた。トムが人生をゲームのように楽しみ勝利していく姿は、エリオットが言うように「幻想的な過去を創造」しているロマンチックな騎士道物語の男らしい男であり、ハックの物語は人生において絶えず葛藤を続ける「絶望的な現在を創造」するリアリズム作品でジムとともに地獄に落ちることを選ぶ男になれない男の物語になっている。

20世紀の作家フォークナーがトウェインを「アメリカ文学の父」と呼びヘミングウェイがハックの物語を「アメリカ現代文学の原点」と称えた。これはトウェインが、当時の大衆文学に属するトムの冒險話の系譜とは別に、ハックの冒險話を作り出しロマンティシズムからリアリズムを枝別れさせたことで、20世紀以降のアメリカ文学における男らしさを巡る『自分探しの旅』物語の原点を造り出したと言える。

北部ニュー・ジャージー州出身のスティーヴン・クレインは、男性性研究の視点からも大きな貢献をした。なぜなら、『赤い武勲章』(1895) の主人公ヘンリー・フレミングの戦場復帰は、従来の本質主義的解釈からすれば「本来備わっている男らしさの復活」であり「人間成長物語」であるが、写実主義的側面からは「戦場でのヒロイズム回復に幻想を持ち続ける男のドン・キホーテ的パロディー」とも読めるからだ。トウェインが「神話」に対する「自信」と「幻滅」をトムとハックの二つの作品で見せたのに対し、クレインは、創劇的アンビギュイティによって、一つの作品にこの二つを併存させたと言える。クレインはモダニズムの原点であるだけでなく、「男らしくない男」を描く文学作品の系譜を20世紀に引き継ぐ作家でもあった。

4 病める男の時代：1898-1970年代

1898年の米西戦争から、アメリカは戦争の時代に入る。第一次・二次世界大戦まで、アメリカは戦勝国であり自由主義国のリーダーという「男らしい国」として自らを確立する。しかし、その後の朝鮮戦争、冷戦、ベトナム戦争、

そしてソ連なき後の「世界の警察」としてのアメリカの中南米・イスラム諸国への侵攻作戦では、アメリカは決定的勝利も正義もなく戦う場所を探し続ける「狂った男国」になってしまう。

この病めるアメリカにおいて、文学作品の男達も病んでいた。テーマは、男の社会的価値ではなく、個としての男の意義であり、「疎外感」と「自己喪失」がその焦点となった。20世紀初期の主人公達は、外見は物静かな傍観者を装っているのだが、実は根無し草のような自分に恐怖し苦しむ鬱の状態にある。戦争で負傷し「死」を経験したヘミングウェイの作品はその顕著な例である。また、フィッツジェラルドは「男らしさの幻影」の両面を『偉大なるギャツビー』(1925)で描く。19世紀の男性的な肉体を現在も誇り持つビル・ブキャナンという浅はかな男の人生は喜劇的である。ギャツビーはフランクリンが理想としたような純粹な形で立身出世を成し遂げた人物ではなかったが、7項目からなる日課表を作り6つの誓いを立てフランクリン的自助努力で財を成し遂げ「過去は取り戻せる」と信じ、結局は悲劇の主人公となってしまう。20世紀の大都会ニューヨークでは、18世紀的男性像も19世紀的男性像もヒーローにはなり得ないことを、「失われた世代」の代弁者ニック・キャラウェイは学ぶのである。

世界大戦が終わって1955年、『アメリカン・アダム』で20世紀前半のアメリカ文学を振り返った文学批評家R.W.B.ルイスは「アメリカ男性作家はアメリカがくぐり抜けてきた歴史的出来事の量の甚大さそしてその衝撃の強さのせいで、すっかり動搖してタガが弛んでしまったように見える」と嘆いている。男達の病は治ることなく、さらに悪化した。狂気の男性文学の誕生だった。喪失した自己へのいら立ちが社会への不満となって表れる。戦争の残した傷跡、冷戦下の緊張感、そして新たなる戦争、そしてまたその傷跡、戦争を繰り返すアメリカの「不条理な世界」の被害者として男達はついに発狂してしまう。自己と内在する他者との対立関係から生み出される自己の模索を扱う自意識小説の誕生であった。

「分裂した自己の物語」は40年代から登場し、朝鮮戦争やベトナム戦争を挟み、70年代まで続く。ヨーロッパではヘッセの『荒野の狼』(1927)やカミュ

の『異邦人』(1942)が出版され、アメリカ白人男性作家は60年代から狂気文学を書き始めた。第二次世界大戦を扱ったジョセフ・ヘラーの『キャッチ=22』は1961年、キージーの『郭公の巣の上で』はその翌年である。戦争と戦争の記憶が男達の心に深い傷を残したのは明らかだが、同時に戦後実存主義哲学が文学に与えたアイデンティティーの問題を深めるきっかけになったのは皮肉な結果と言えよう。

5 男が男でなくなる時代：1970年代—現代

1970年代頃からであるが、白人男性としての主体性を放棄することにより自分らしさを受け入れトラウマから解放される男の物語が生まれはじめた。男性解放運動が展開された結果なのか、男らしさの鎧をぬぐ男達が登場し始めたのだ。60年代までの様々な反体制運動やカウンターカルチャーに疲弊した若者達が自分自身に関心を向けるようになったのもこの頃である。これは一般にミージェネレーションと呼ばれ自己中心世代などと訳されるが、この動きは決して否定的なものではなかったはずだ。自らのアイデンティティーを静かに見つめ直す、これはエモリー・エリオットが指摘するところの「自己回帰的小説」に近い現象である。ジョン・アーヴィングの『ガープの世界』(1978)はフェミニズム運動やフリーセックス、レイプ、交通事故、殺人など戦後アメリカの暴力の嵐の中で傍観者として成長していくガープの一生を時にはユーモラスにそしてストイックに描いている。トバイアス・ウルフの『ボーズ・ライフ』(1990)では作家自身の半生が描かれる。両親の離婚により「男らしさ」のロールモデルである父を失い、母の再婚後は義父の暴力に耐えて生きていくことになる。主人公は、最後には家を脱出して新たなる人生へと旅立つのであるが、皮肉なのは取り残された義父の姿である。他を力によって征服することで自らを男として律してきた義父が、「俺はどうしたらいいんだ」と泣き崩れる。伝統的男らしさの崩壊と父親不在でもたくましく成長していく新しい生き方が交差していく。ジョン・アップダイクの短編『噂』(1994)は、ゲイとの関係が噂され妻にひどく詰め寄られる男の心理ドラマだ。結婚生活に潜むジェンダー観の違いが破局を迎えるという一つの筋とは別に、噂によって自らの「男」が傷つ

けられたと思う主人公が徐々にヘテロな生活に嫌気がさしホモセクシャルな関係に魅力を感じ始める。夫を演じ続けることが必ずしも幸福ではないと悟る男の心の揺れが描かれている。

またアイデンティティーの問題を解決する方策として、自己の内面を見つめそこに存在する多くの他者を認識し彼らとの共生を試みることで、フランクリン的な Self-Made Man とは対照的な Others-Made Man を模索したり、男であることから主人公を解放するために女性や動物などに変身させる物語を創出する作家達が登場し始める。スティーヴ・エリクソンやデニス・ジョンソンそしてドン・デリロなどがそうであり、これらネオ・ポストモダン的な作家達は現実社会にメタフィクションを超えた解決方法を提示し始めている。

B. ポストモダンと他者達の文学

人種や民族において少数派と呼ばれる作家達は、自らをアメリカ社会における弱者と位置付け社会を告発する作品を発表し権利回復運動の一つとしてきた。世界大戦後、男性作家達は一方で同種の告発を続けながら、もう一方では自らのアイデンティティーに苛まれる姿を描き出した。なぜなら、少数派の男性達は内集団では力を持った主体として君臨するが、ヨーロッパ系白人男性との関連においては弱者であり客体化されてしまうからだ。ここでは、「弱い男性」という烙印を押された男達のステレオタイプ像と彼等のアイデンティティーとの葛藤を紹介する。

ユダヤ系アメリカ人男性の場合、キリスト教の影響などで、伝統的ユダヤ人像は裏切者、選民意識、彷徨える者、守銭奴、寛大、温和、忍耐、教育の重視、非暴力、知性は高いが受動的などといったステレオタイプが与えられた。近現代のイメージは、ホロコースト経験によるもろさや無防備などと、戦後のパレスチナにおけるユダヤ人国家建設やイスラエルの発展と存続を目指す運動シオニズムによる暴力性という相反するイメージが与えられる。文学作品においては、ホロコーストの直接・間接的記憶により自らの揺らぎを修復できないでいるソール・ベロウの作品群は前者のユダヤ人男性の被害者意識を扱っており、ロスの『ポートノイの不満』(1969) は後者に属すると言えよう。最近では、

ヨーロッパ系白人に同化した「粗野で野蛮なアメリカ人男性」としてのタフなユダヤ人像というもう一つのステレオタイプがあると指摘する声もある。タフであるかどうかは定かでないが、非ユダヤ的主人公を扱う作家としてはサリンジャー やオースターを挙げることができよう。

先住民には、新世界発見以来の二つのイメージがある。抵抗する野蛮人としての残虐さと同時に滅び行く民族としての悲観的な孤独な戦士像は、果敢さや大胆さという語句を伴って形容される。しかしながら、現在では保留地での閉鎖的生活故に国家やアルコールに依存しているといったステレオタイプもあるとされる。1989年にオグララ・ラコタ族の養子になったイタリア系アメリカ人脚本家ジョン・フスコの『サンダーハート』(1992)は70年代の先住民族解放運動が背景だ。先住民の血を引いていることを恥じる主人公が先住民保留区での殺人事件を捜査するうちに自らのアイデンティティへの誇りを取り戻す内容である。女性作家シルコーが1977年に執筆した『儀式』は戦場から帰ってきた主人公がアメリカ社会へ適応できず先住民文化へ帰属する物語であり、民族解放運動を促す啓蒙的な作品である点でこの二つの作品は同じだ。が、『サンダーハート』は男の物語としての特色を持つ。つまり、捜査の過程で父親の実像を取り戻し保留区に住む男性達とホモソーシャルな関係を築き上げることによって先住民的男らしさを回復し白人社会へ戻っていく自己回帰の物語となっているのである。

アフリカ系アメリカ人男性のステレオタイプは、愚鈍、怠惰、従属に満足、暴力的、性的欲望が強い、身体能力が高い、音楽的才能があるなどである。二人のアフリカ系アメリカ人を見てみよう。マイケル・ハーパーの詩“Nightmare Begins Responsibility”(1977)では、労働者階級の貧しい父親が危篤状態の息子の命をエリートの白人医師に委ねねばならない自己の無力を描く。ナレーターはすでに2人の息子を同様な状況で失っている。父と子という独特な縁の間に介入する白人への強い不信感以上に、父親としての責任を何ら果たせない自身の無力さがトラウマを形成していく。チャールズ・フラーの戯曲『ソルジャーズ・プレイ』(1981)は南部の陸軍基地内で起こったアフリカ系アメリカ人軍曹の殺害事件を発端に、アフリカ系アメリカ人男性のアイデンティティー

がいくつも提示される。事件はハーヴード大学出身のアフリカ系エリート将校によって解決に向かうのだが、劇中では白人達によって作られたステレオタイプに対し自らのアイデンティティーを否定し白人化した男やアンクル・トム化し白人に媚びを賣ることにより自らの安全と地位を守ろうとする男などが描かれる。大尉はその知性故に自らの人種を超えた判断能力で解決を試みるのだが、彼が最後に発見するのは「内なる差別」の存在だった。アフリカ系アメリカ人男性の現状と理想をここでは語り上げている。

ヒスピニック系はマキズモつまり男っぽいタフさがその特色とされる。女嫌いを装い好戦的であるのは男尊女卑信奉が根底にあるからだが、その一方で家族愛が強く宗教心（カトリック）に厚いなどのステレオタイプがある。チカーノ系作家リチャード・ロドリゲスの『証拠』（1988）は、アメリカ生まれのメキシコ系ジャーナリストが二つのアイデンティティーの狭間で揺れ動く物語だ。家族を支えるために母国メキシコからアメリカに渡り苦労を続けてきた男達の歴史は19世紀以降今なお続いていることを、彼はインタビューで知る。作中のメッセージ「男には責任がある。男は真剣だ。男は忘れない。」は、異国アメリカにいても消えることのない母国や家族への想いを伝える。アメリカ化された生活の中にメキシコは絶えず存在し、金持ちになり家族を呼び寄せることを使命とする男の任務は続くのである。

アジア系男性は、肉体的に弱い、他文化と比べて非男性的であるとのステレオタイプとともに、控え目、謙虚、行儀がよい、法を遵守する、教育熱心、勤労、密接で羨の行き届いた家族を形成する少数派のロールモデルと位置づけられ、家庭的で従順なイメージが連想されるという。したがって、アジア系男性の作品にも白人に対して弱者としての男が描かれる。ロニー・カネコの『The Shoyu Kid』（1976）は第二次世界大戦時の日系アメリカ人収容所での話である。アメリカ社会とは遮断されたこの世界で、男の子達は日本語を交えて意思の疎通ができる生活を満喫する。男達はそこでは主体となるのだ。しかし、子供達の一人が実は米兵に性的嫌がらせを受けていることを知るとき、彼らは一瞬にして弱体化しアイデンティティーも非男性化していく。作品の最後で少年達が無気力状態で地平線での奇妙な光を目撃する時、それが原子爆弾の実験風景で

あるのかどうか定かではないが、少なくともアメリカにおける日系男性の不安定な未来を暗示しているのは確かだ。リーヤン・リーの詩「柿」(1986)では、柿を巡ってアメリカと中国の文化が対峙する。小学校での授業や白人のガールフレンドとの交際で、少年は違和感を持ちながらもアメリカ化していく。この少年を支えるのは彼の父である。毛沢東の専属医で政治難民でもあった父の「人にはいつまでも残るものがある」という言葉により、詩人は中国人としてのアイデンティティーを軸に自らを律することに安心するのである。非男性化と自己解決、アジア系アメリカ人のステレオタイプを再現する二作品と言える。

性的少数派であるゲイ達のクィアな作品にも男達の心の揺れが描かれる。マイケル・ラッセルの「死に行く弟を見取る方法」(1990)はエイズで死ぬゲイの兄の視点から語られる戦略的な詩である。兄は異性愛者であり家庭を持っている。以前ゲイであることを理由に弟を勘当し、今回も死に際し冷静に接しようとする。ナラティヴも、ほとんどが命令形であり、ヘテロからホモセクシャルへの境界を超えないよう懸命に自己を律し弟の死に臨む。しかし、弟のパートナーとの会話からジェンダーに捕われない愛の存在を学ぶ。最後には子供のころ何の偏見や抵抗もなく父親に抱かれたことを思い出し、「もう強くなくていいんだ」と悟る。ホモフォビア（社会）に対し男らしくあることの愚かさを鋭く指摘する名作である。グレッグ・シャピロの詩「バービーと呼んで」(1992)では MTF（女性としての行動をとる男性）が語りかける。人形遊びが好きで手先も随分と器用なナレーターは、将来ケン人形のガールフレンドであるバービーになりたいという夢を語る。この詩を詳解すれば MTF であるが故に親戚や周りの人々からナレーターが差別されてきたことを感じ取ることができる。しかし、この詩の前面にあるのは家族の暖かいまなざしの下で将来は人形のバービーのようになりたいと願う非常に明るいトーンと純粋な想いであろう。男らしさの神話とまったく関係のない世界で生きることを許された若者の自由な性がそこにはある。

おわりに

男とは何なのか。本稿を終えるにあたって、この問い合わせに答えるのはますます困難である。強いて言うのであれば、「不安定な性」ということだろうか。男性神話自体が不安定であり、その時代時代によって男らしさの定義は変化する。それによって、実際の男達の判断も左右される。あるときは神や国家に対して誠実であることが男らしいとされていたことが、他の時代では抵抗することが男らしいと賞賛される。また、同じ男でも、他者との関係において強者にも弱者にもなる。そうなると、男を基準に男を考えること自体意味をなさないことがある。「男が男を語る」という本稿の題目にしても、前者の「男」と後者の「男」をどう定義するかで、もちろん定義できたらの場合だが、「男」が揺らぐ。そうなると、ますます安定した答が欲しくなる。では、「男とは実在しない虚構の性である」という結びは如何だろうか。

*本稿は2006年度名古屋大学英文学会クリスマスセミナー（2006年12月22日）における講演に基づくものである。

Selected Bibliography of Works Consulted

- Adams, Rachel, and David Savran, eds. *The Masculinity Studies Reader*. Malden, MA: Blackwell, 2002.
- 別府, 恵子, 渡辺和子, 編著. 『新版アメリカ文学史』東京: ミネルヴァ書房, 2000.
- Berger, Maurice, Brian Wallis, and Simon Watson. *Constructing Masculinity*. New York: Routledge, 1995.
- Brod, Harry, ed. *The Making of Masculinities : The New Men's Studies*. Boston: Allen & Unwin, 1987.
- , and Michael Kaufman, eds. *Theorizing Masculinities*. Thousand Oaks, CA: Sage, 1994.
- Carroll, Bret E., ed. *American Masculinities : A Historical Encyclopedia*. Thousand Oaks, CA: Sage, 2003.
- Catano, James V. "The Rhetoric of Masculinity: Origins, Institutions, and the Myth of the

- Self-Made Man." *College English* 52. 4 (1990): 421-36.
- Elliot, Emory, gen. ed. *Columbia Literary History of the United States*. New York: Columbia UP, 1988.
- Hobson, Barbara, ed. *Making Men into Fathers : Men, Masculinities, and the Social Politics of Fatherhood*. New York: Cambridge UP, 2002.
- 伊藤、公雄. 『男性学入門』 東京：作品社, 1996.
- Kimmel, Michael S. *Manhood in America : A cultural History*. New York: Free P, 1996.
- . *The Gendered Society*. New York: Oxford UP, 2000.
- . *Handbook of Studies on Men and Masculinities*. Thousand Oaks, CA: Sage, 2004.
- Lewis, R. W. B. *The American Adam : Innocence, Tragedy and tradition in the Nineteenth Century*. Chicago: U of Chicago P, 1955.
- McLaren, Angus. *The Trials of Masculinity : Policing Sexual Boundaries 1870-1930*. Chicago: U of Chicago P, 1997.
- Rotundo, E. Anthony. *American Manhood : Transformations in Masculinity from the Revolution to the Modern Era*. New York: Basic Books, 1994.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men : English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- 瀬名波、栄潤. 「アメリカ文学における『男らしさ』の系譜」『北海道アメリカ文学』 20 (2004), 37-48.
- Wiegman, Robyn, and Elena Glasberg. *Literature and Gender*. New York: Longman, 1999.

Synopsis

Man Speaking of Man:
American Literary History and the Study of Manhood
Eijun Senaha

Prior to the rise of the Men's Liberation Movement in the 1970s, the study of masculinity was routinely neglected. However, with the rise of the movement, male identity and the notion of the ideal man in American history and literature should be re-examined through the prism of the male perspective, as these contexts shed light on the long neglected, but vital, field of "manhood" in gender studies. In this essay, I first introduce the history of the Men's Liberation Movement and its impact on academia. Second, I re-interpret US history, showing how politics and the nation-building experience created a "myth of manhood," first analyzing white male writers' growing anxieties as expressed through their literature, then by examining the works of male minorities, including gays, especially their response to their ambiguous identity, as characterized by a stronger identification within but weaker identification outside of their particular community.

An examination of manhood, as depicted in American literary scenes from the Colonial period to the present, reveals that traditional manhood has been valued for its social contributions and successes, and the literature has recorded the history of men's struggle with the notion of ideal manhood.

In Colonial literature, religion played a significant role in the creation of an American Adam in the New World. During the period of Republicanism, the ideal of the "self-made man," as presented in biographies and autobiographies, helped the newly born nation become politically independent in both urban and rural contexts. The 19th century witnessed the rise of the self-made man as expressed by the ideal of the "American dream," gradually defined by economic success in an increasingly

colonialist as well as capitalist America. However, during this period, many men began to experience anxiety over the traditional manhood as presented in *Huckleberry Finn*. This unresolved anxiety was inherited by the literary characters of the next century, as the anti-hero of the Lost Generations assumed the role of protagonist, while the traditional masculine hero took on the role of antagonist in the modernist world; the new literary heroes struggled with their divided selves. Postmodern American literature ultimately reconciles white males to their multiple selves, enabling them to coexist.

Postmodern America also accommodates a much wider range of literary voices, reflecting an increasingly complex national character with respect to gender, race, ethnicity, and class. In the following section, I introduce Jewish-American, African-American, Native-American, Chicano, and Asian-American stereotypes, and examine each group's corresponding response: each seeking, through its literature, to define America, and its own particular identity, from the perspective of a weaker male identity.

The literary history of American manhood illustrates the submission, confusion, and eventual awakening of men of various backgrounds from a sort of socio-political gender hypnotism. Through "man speaking of man," we will hear new voices reveal a hidden American literary history of manhood.